平成 28 年度　咸宜園教育研究センター春季企画展

咸宜園開塾 200 年記念

『廣瀬旭荘・敬四郎文庫』

～旭荘子孫に伝承した史料群～

日田市教育庁咸宜園教育研究センター

平成 28 年度　咸宜園教育研究センター春季企画展

咸宜園開塾 200 年記念

『廣瀬旭荘・敬四郎文庫』

～旭荘子孫に伝承した史料群～

日田市教育庁咸宜園教育研究センター

ごあいさつ

咸宜園教育研究センターでは、去る平成二四年（二〇一二）、廣瀬淡窓の末弟である廣瀬旭荘の没後一五〇年記念の特別展「廣瀬旭荘 ―東遊 大坂 池田―」を開催いたしました。その後、この特別展が契機となって旭荘の四男・廣瀬敬四郎のご子孫である廣瀬敬一様から、旭荘と敬四郎を中心とする貴重な史資料をご寄託いただきました。

廣瀬旭荘は二五歳の頃、咸宜園の第二代塾主となりましたが、天保七年（一八三六）、三〇歳の時に東遊し、以後二五年余りの間、大坂・江戸に住み塾を開き、多くの文人たちと交誼を持ちました。また、この間、山陰など諸国を巡遊しました。旭荘には漢詩集『梅墩詩鈔』、日記である「日間瑣事備忘録」など多数の著書がありますが、特に漢詩人としての評価は高く、中国清末の兪樾が「東国詩人の冠」と激賞したほどでした。

旭荘には六男三女がありましたが、長男の林外（孝之助）は淡窓の養子となり、咸宜園の第四代塾主となりましたので、四男の敬四郎が実質的に旭荘家を継ぎました。

廣瀬敬四郎は嘉永四年（一八五一）に大坂で生まれ、旭荘の元で成長しますが、文久三年（一八六三）の旭荘没後、一家で日田に引き上げてきました。敬四郎は咸宜園に入塾して、兄である廣瀬林外に学び、明治五年（一八七二）には慶應義塾に横田国臣ら共に入社しています。その後、地方官吏として活躍し各地へ赴任する中、愛媛県・熊本県・神奈川県においては収税長を務めました。

今回の企画展では、「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」と題しまして、旭荘に関わる史料のほか、旭荘と交流のあった文人たちや敬四郎にまつわる史料についてもご紹介いたします。

皆様には、この企画展を通して廣瀬旭荘と敬四郎の足跡とその人物像について理解を深める機会としていただければ幸いでございます。最後に、この企画展の開催にあたり、貴重な資料の出陳を快諾いただきました廣瀬敬一様に厚くお礼を申しあげます。

平成二九年二月　　**咸宜園教育研究センター名誉館長　後藤宗俊**

『廣瀬旭荘・敬四郎文庫』～旭荘子孫に伝承した史料群～

目　次

ごあいさつ　咸宜園教育研究センター名誉館長　後藤　宗俊　3
写真図版　5
第一章　廣瀬敬四郎について
廣瀬敬四郎の父・旭荘とは　17
旭荘の婚姻歴　18
敬四郎誕生　18
初めての日田　19
父・旭荘亡くなる　19
咸宜園入塾　20
慶應義塾入社　20
官吏として奉職　20
敬四郎の家族たち　21
現在へ　21
第二章　「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」とは　22
出品資料図版・解説　24
展示資料一覧　30
参考文献　31

凡　例

一　本書は、平成二九年二月一六日（木）～三月三一日（金）まで咸宜園教育研究センターで開催する春季企画展「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」の展示解説書である。

二　本展の企画及び本書の執筆・編集は主に溝田直己が行い、吉田博嗣が補佐した。

三　掲載写真等は、資料所蔵者及び関係機関より借用し、その他の写真は雅企画（長谷川正美氏撮影）に委託した。

四　出品資料の写真図版は、巻末の出品資料図版・解説に一部掲載した。また本文中の図版は出品資料の一部であり、展示解説に必要な参考資料として出品資料以外の写真も掲載した。

五　左記の各位・機関の協力を得た。記して感謝の意を表します。
廣瀬敬一・公益財団法人廣瀬資料館（本文中は廣瀬資料館と表記）・廣瀬貞雄・中島龍磨・廣瀬洋一・園田大・大野雅之・二宮健・橋本千和子・松井公男・藤波則子・髙倉幸子・十時イミ・重松路子・酒井里佳・財津美穂子・櫻井みどり・松ヶ野彩（順不同・敬称略）

写真３　印章

写真２　廣瀬旭荘子孫家伝来眼鏡

写真６　印章

写真５　印章

写真４キャンドルスナッファー

写真１　墨台（墨床）

写真８　印章

写真７　印章及び印材

写真１２　廣瀬建吉鞄

写真１１　文鎮

写真１０　印章

写真９　印章

写真１４　印章

写真１３　筆置

写真１９　印章

写真１８　印章

写真１７　印章

写真１６　印章

写真１５　印章

写真２４　印章

写真２３印章

写真２２　印章

写真２１　印章

写真２０　印章

写真２８　印材

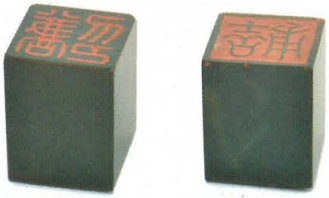


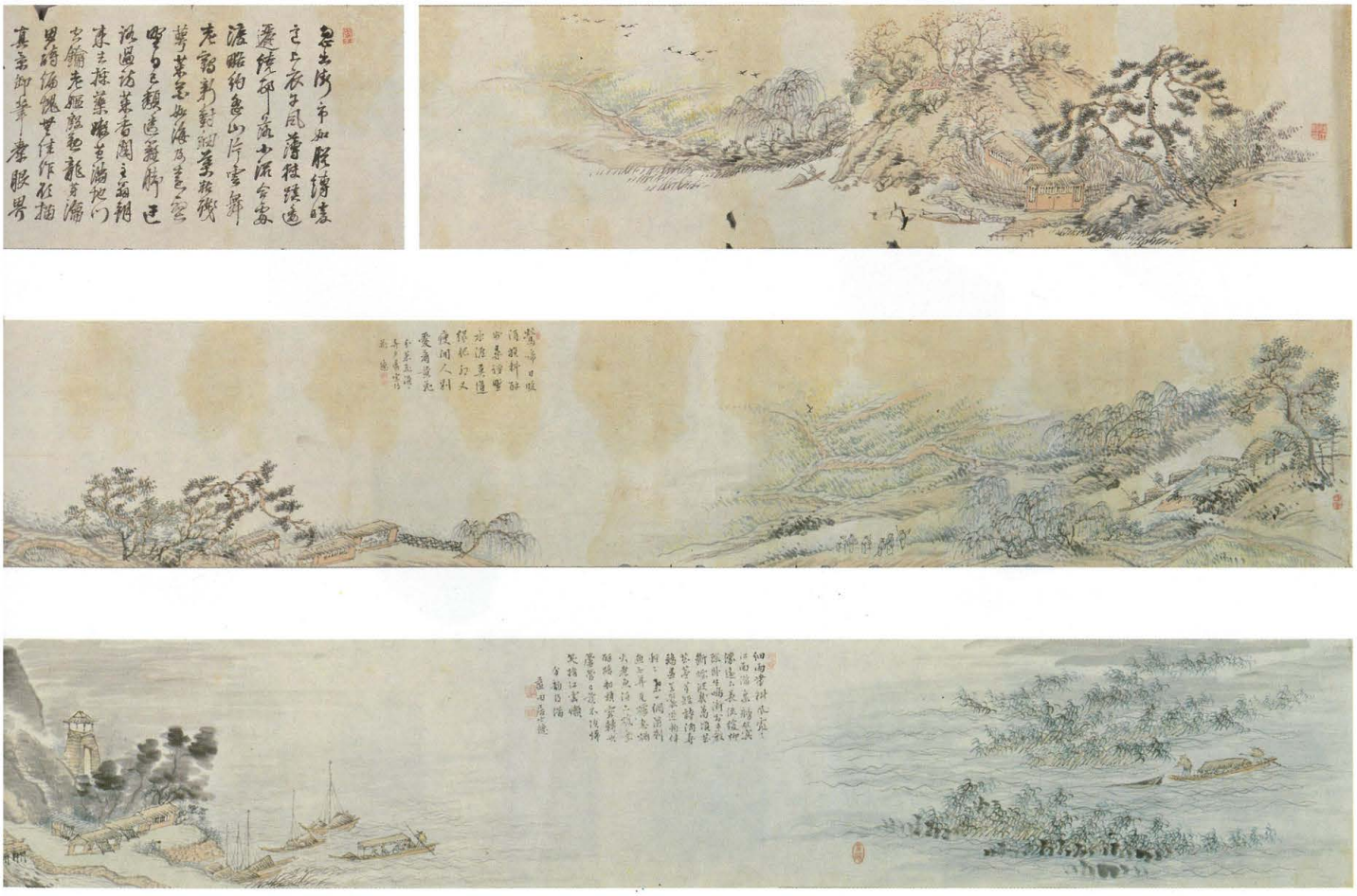
写真２７　印章

写真２６　印章

写真２５　印材

写真29　林外廣瀬先生嘱書画巻子

写真30　書画巻子



拾翠踏青成隊過東風蝶舞
又驚歌溶〻春色滿春潭借問
何邊勺藥多
櫻桐
林外

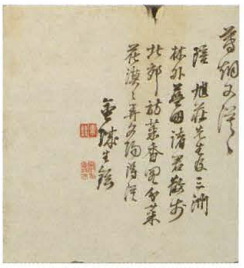
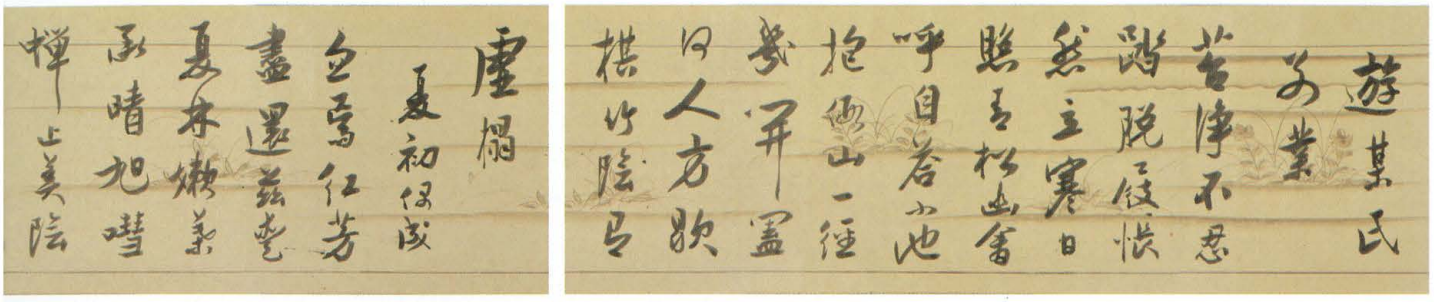


写真31　旭叟詩書



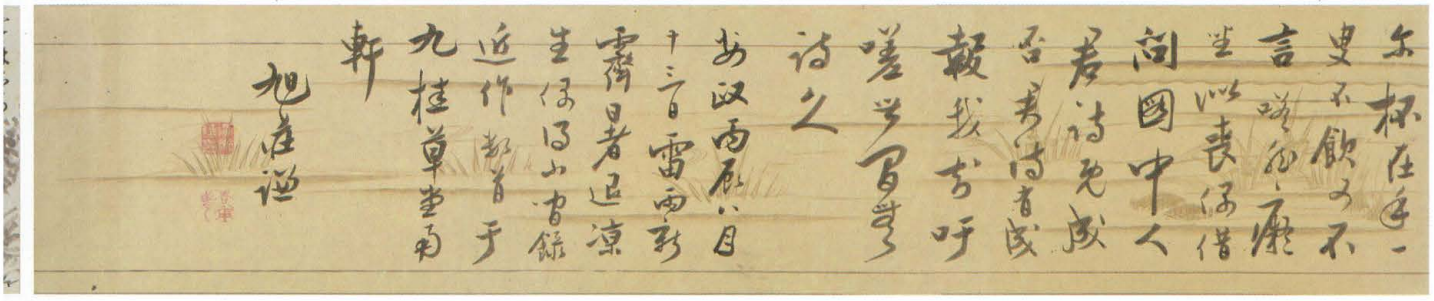
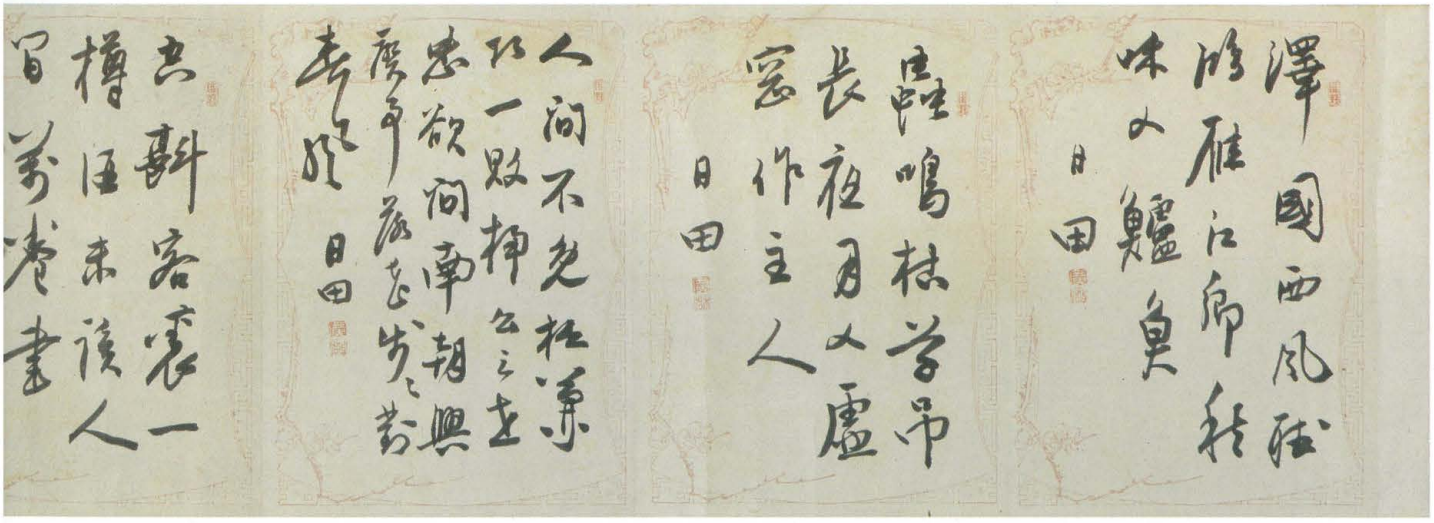


写真32　日田（廣瀬敬四郎）書



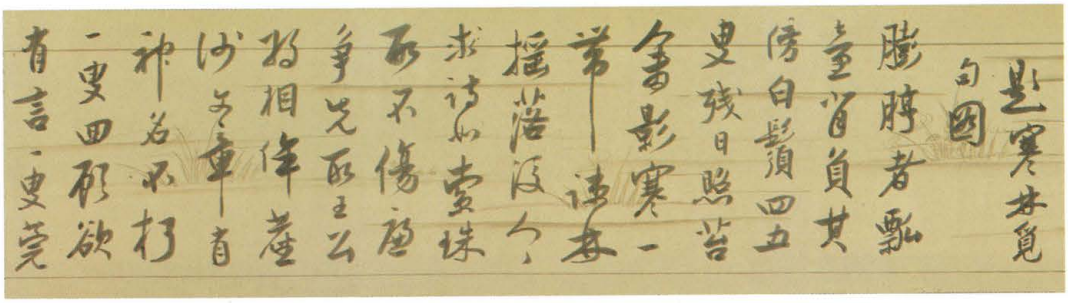
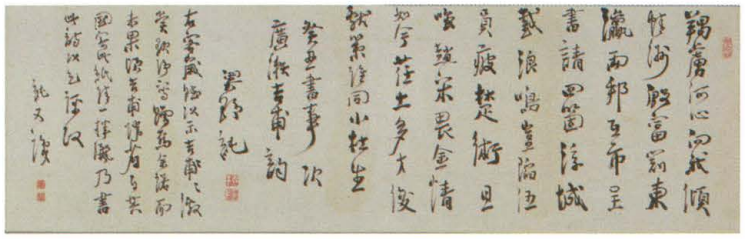
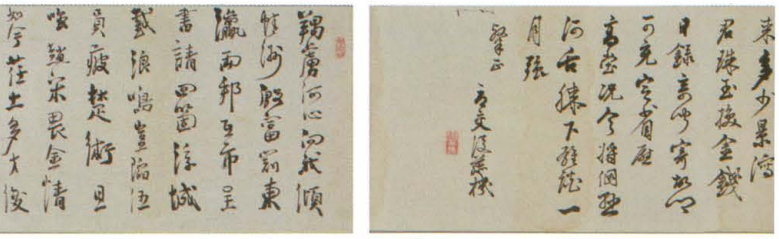
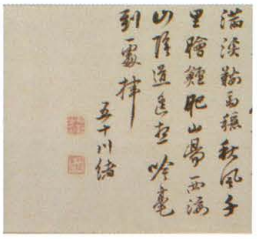
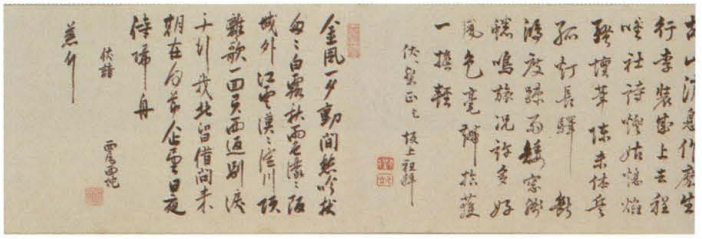


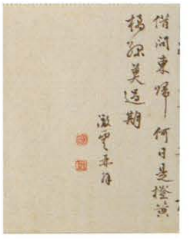
写真33　廣瀬旭荘送西下漢詩巻子（旭荘西下）

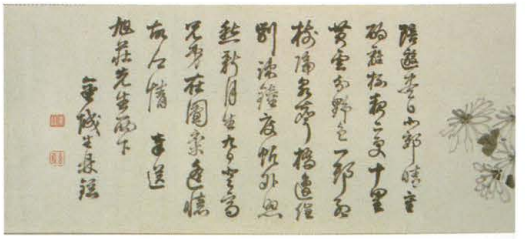


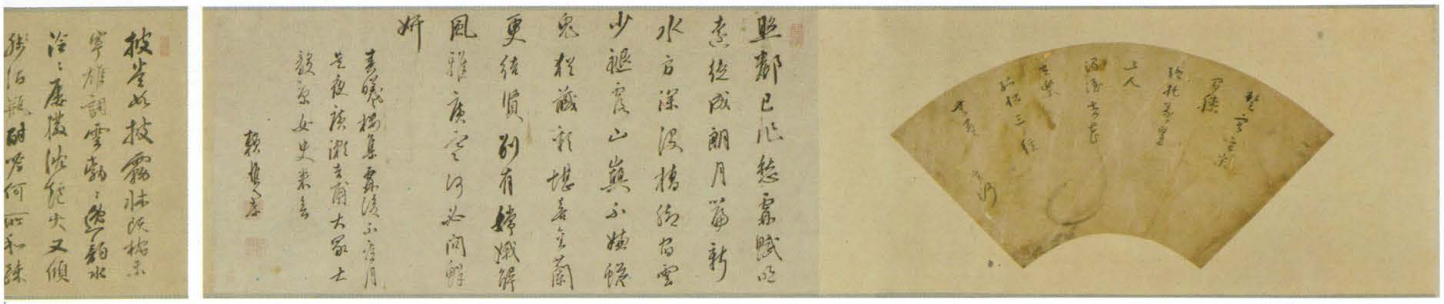


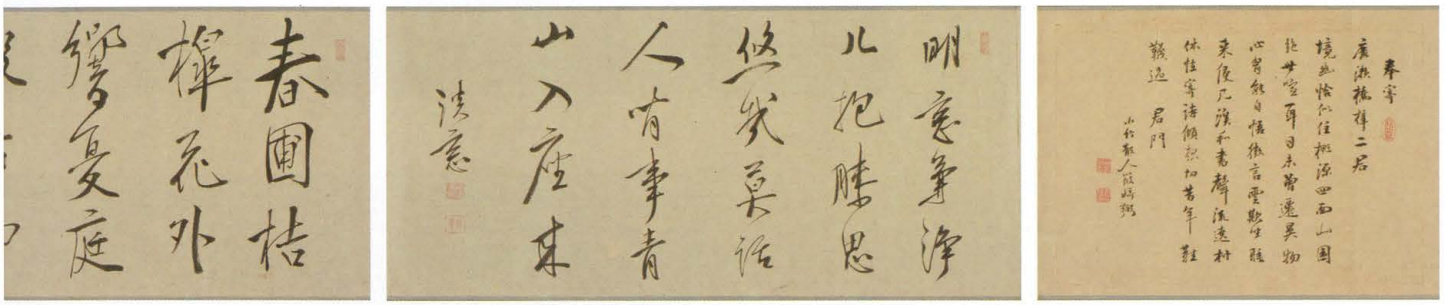


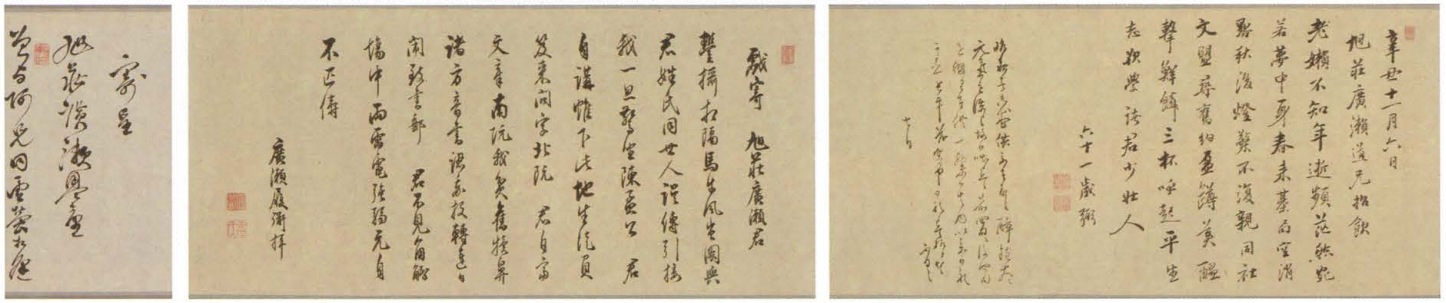


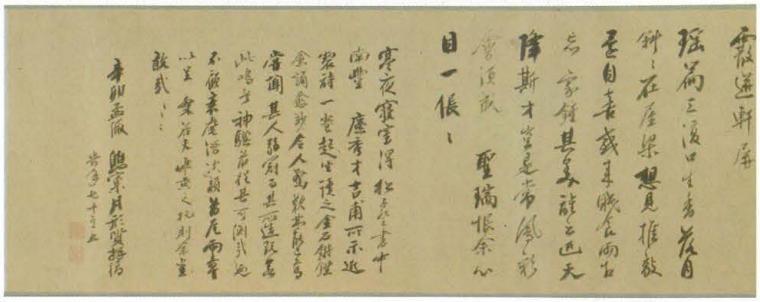


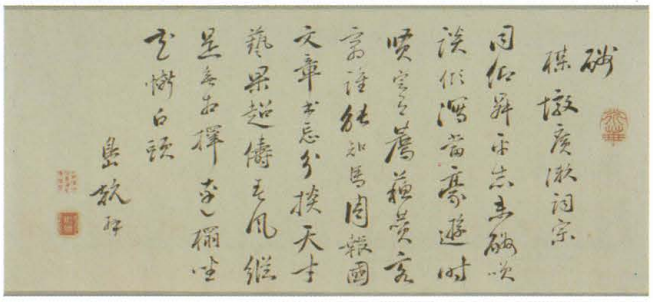


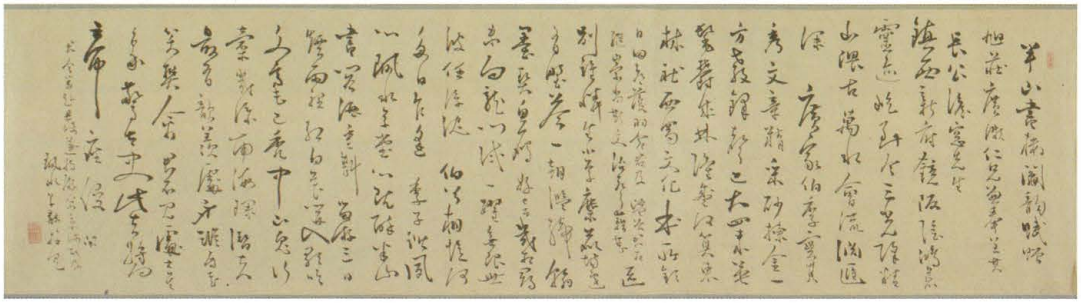


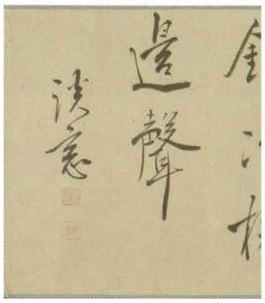


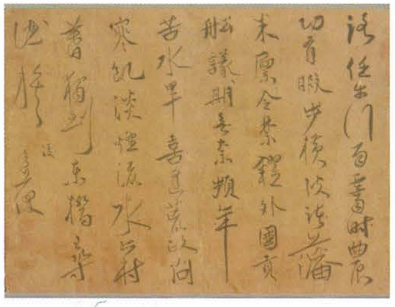












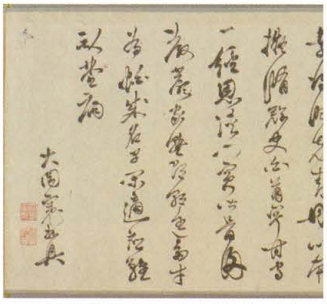
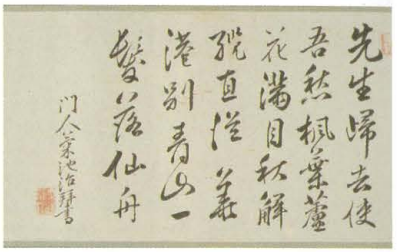
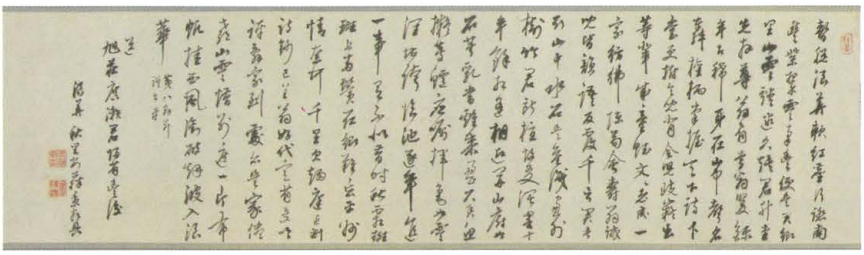
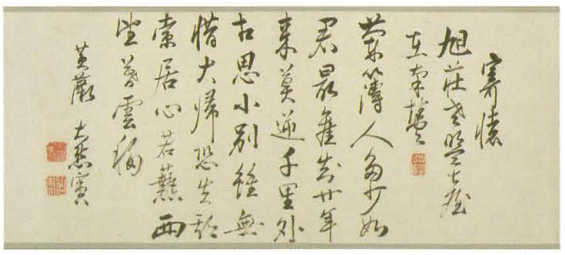
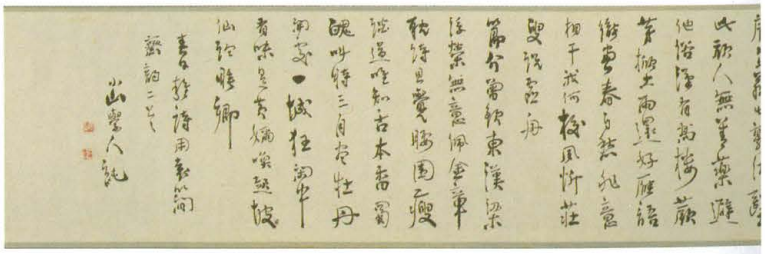


写真35－1　旭荘先生西省卷子（旭荘帰省）









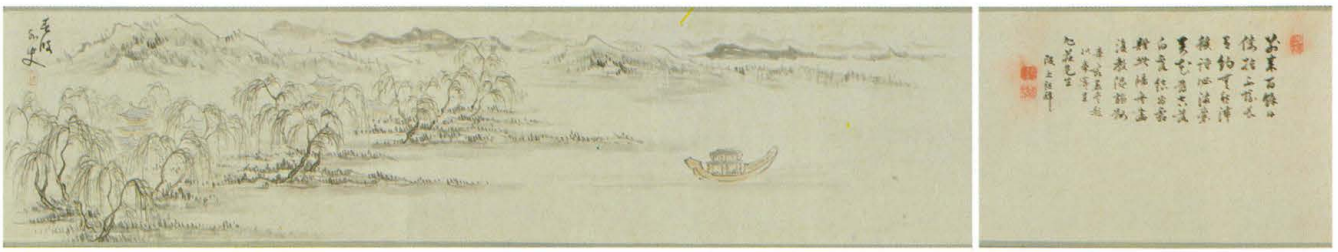
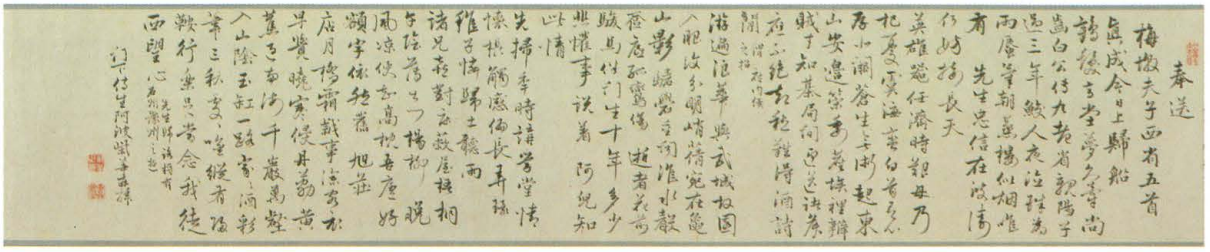


写真35－2　旭荘先生西省巻子（旭荘帰省）



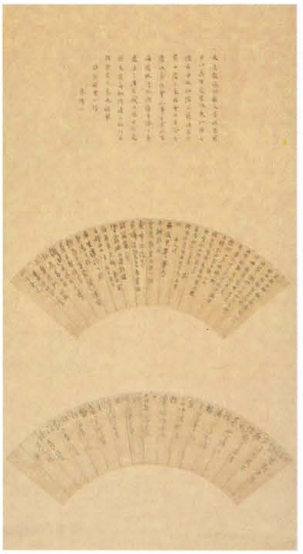


写真36　廣瀬淡窓・旭荘・林外書

写真37　廣瀬旭荘書画「夢登富山」

写真38　廣瀬旭荘書「細字書」

写真39　吉川松谷画「芝仙竹寿図」

写真40　平野五岳画　廣瀬旭荘書

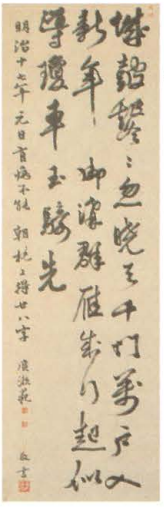


写真41　廣瀬青邨作・敬四郎書「七言絶句」

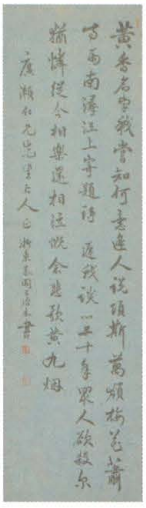


写真42　王治本書

写真43　山下秀実書

写真44　田能村小虎（直入）画「西下図」

第一章　廣瀬敬四郎について

廣瀬敬四郎の父・旭荘とは？

廣瀬旭荘は文化四年（一八〇七）五月一七日に豊後国日田郡豆田町魚町の廣瀬宗家第五世の三郎右衛門貞恒（長春庵桃秋）と母ユイの八男として生まれ、咸宜園を開いた淡窓や廣瀬宗家第六世を継いだ久兵衛の末弟にあたります。

旭荘は長兄・淡窓と二五歳差、次兄・久兵衛とは一七歳と年齢の離れており、旭荘は名を謙、通称を謙吉、字は吉甫といいました。初めは秋邨と号して、次いで旭荘や梅墩と名乗りました。のちに秋邨の号については旭荘の弟子の一人であった柴六郎（柴秋邨）に譲っています。

文政六年（一八二三）、旭荘が一七歳の時に淡窓の養子となり、咸宜園の塾政の補佐をしました。二二歳の時には一時、豊前浮殿（大分県宇佐市周辺）で開塾し、翌年には淡窓に代わって、肥前田代の対馬藩校・東明館で教授しています。

そして、旭荘二四歳の天保元年（一八三〇）、淡窓が隠居をして自身の勉学に専念すること、淡窓自身が長福寺学寮において教授を始めた年齢と旭荘が同じであることなどを理由に塾政を旭荘に譲ることが決まります。

しかし、旭荘が新塾主として就任した天保二年（一八三一）、塩谷大四郎日田代官（のちに西国筋郡代に昇格）より「官府の難」と呼ばれる咸宜園への教育介入が行われるようになり、新塾主である旭荘とそれを支えた淡窓にとって、苦しい状況が続くことになりました。

結果として、この「官府の難」は、天保六年（一八三五）、幕命で塩谷代官が江戸へ戻るまで続きました。そして旭荘は塾主就任以前から抱いていた上方（京都や大坂など）への遊学の思いを果たすため、翌天保七年四月、三〇歳の時に日田を発ち、堺へと向かいました。

これ以後、旭荘は堺に二年、大坂に前後二〇年、江戸に三年ほど滞在して、私塾を開き教授に務めます。また旭荘は病弱であった兄・淡窓とは異なり、その行動範囲はとても広く、日本各地にその足を延ばしおり、様々な人々と交流を持ちました。

九州では亀井昭陽（福岡藩）、樺島石梁（久留米藩）、古賀穀堂（佐賀藩）、草場佩川（佐賀藩）、中国地方では、菅茶山（福山藩）、頼杏坪（広島藩）、村田清風（長州藩）などがいます。

最も長く過ごした大坂では篠崎小竹、藤澤東畡、那波網川、後藤松陰、安藤秋里、間瀬松響、篠崎訥堂、田能村小虎（直入）、奥野小山、橋本香坡、廣瀬筑梁、菊池渓琴、池内陶所、松林飯山、釈龍譲、月性、新宮涼廷、秋元秀蔵、緒方洪庵、岡部玄民、小田海僊、中西耕石、小林石峰、田中秋亭、北尾墨香（備禹）、手塚春波（称太兵衛）・呉北渚（肥前屋又兵衛）・坂上九山（平野屋甚左衛門）・藤井藍田（綿屋右衛門）・高松舫洲（白粉屋長左衛門）・頼左采眞、鴻池善右衛門などがいます。

江戸では羽倉簡堂、松崎慊堂、佐藤一斎・古賀侗庵、林述斎・林復斎・林檉宇、岡本花亭・朝川善庵・坪井誠軒・井上総州・筒井鑾渓、安積艮斎・斉藤拙堂・大槻磐渓・野田笛浦・沢熊山・梁川星巌・菊池五山・塩谷弘蔵・佐久間象山など枚挙にいとまがないほど、旭荘は多くの文人と交流しています。

このような江戸後期を代表する文人と関わりがあったことが旭荘の日記や随筆などから伝わりますが、旭荘の四男である敬四郎家には大坂の文人らと関わりのある資料が多く伝わっています。

廣瀬敬四郎肖像写真
（「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」）

「廣瀬旭荘肖像」・「塩谷大四郎正義肖像」（公益財団法人廣瀬資料館蔵）

旭荘の婚姻歴

旭荘は生涯で五度の結婚をしています。最初は文政一三年（天保元年＝一八三〇）一一月に筑後国生葉郡朝田村（福岡県うきは市）の足立アサと結婚します。しかし、旭荘の「直情径行」な性格が原因だったのか、天保三年には離縁しています。

二番目の妻・合原松とは、天保三年（一八三二）一一月に結婚しています。松は筑後国吉木村（現・久留米市草野町吉木）の若宮八幡宮の合原氏の娘です。旭荘は松との間に二男一女をもうけますが、長男の孝之助（のちの廣瀬林外）以外は幼くして夭逝しています。天保一四年（一八四三）に大坂を中心に活動していた旭荘は居を江戸に移して、翌年の天保一五年に妻・松を江戸に呼び寄せますが、松は病にかかってしまい、江戸で死別しています。この時、松はまだ二九歳でした。旭荘は松への懺悔と哀悼の思いをしたためた『追思録』を書き上げ、日田に残した息子・孝之助に送っています。

『追思録』
（公益財団法人廣瀬資料館蔵）

松を亡くした翌年である弘化二年（一八四五）、周囲からの勧めもあり、旭荘は信濃国向関の平野敬と三度目の結婚をすることになります（正式な婚姻ではなかったようです）。江戸から大坂へ帰ってきた旭荘は、敬との間に三男・忠三郎が誕生しますが、嘉永元年（一八四八）に離婚しています。その後、日田で養育していた忠三郎も五歳で亡くなっています。

再び独身となった旭荘を心配した兄・久兵衛は妻帯を勧め、大坂の友人や門下生らも旭荘の結婚の世話をするようになり、様々な縁談の話が持ち上がりました。嘉永二年（一八四九）、最終的には門下生の藤井藍田が紹介した播磨国姫路の播磨屋の木村（山名）瑛子と四度目の結婚をすることになりました。この瑛子が廣瀬敬四郎の母となる人物です。旭荘は瑛子との間に次女の信子をもうけますが、生後二ヶ月で亡くなっています。結局、旭荘は瑛子とも嘉永四年（一八五一）五月に離婚することになります。しかしこの時、瑛子は四男・敬四郎を身籠もっており、旭荘はそれを知りませんでした。

瑛子と離婚した翌月、旭荘は日田へ帰省しています。この時、旭荘は文政六年（一八二三）来、淡窓の養子となっていたものを弟に復し、旭荘の長男である孝之助を淡窓の養子としました。

再び日田から大坂へ向かった旭荘は、長府（現・山口県下関市）に立ち寄り、最後の妻となる清水瀧との婚儀を進めて、瀧を連れて大坂へ向かいました。大坂へ戻った旭荘は前妻である瑛子が敬四郎を生んだことを知り、引き取って育てることにしました。

清水瀧との間には二男一女をもうけますが、三女の義子は夭逝、敬四郎の異母弟となる五男・正吉は安政二年（一八五五）に、六男・龍吉は文久二年に生まれており、のちに敬四郎・正吉・龍吉ともに咸宜園で学んでいます。

敬四郎誕生

嘉永四年（一八五一）、一〇月一七日、廣瀬敬四郎（幼名・仁四郎）は旭荘と四番目の妻・瑛子との間に四男として生まれました。敬四郎の家に伝わる履歴書では、摂津国西成郡淡路町の生まれとありますが、敬四郎が生まれた時にはもうすでに旭荘と瑛子は離縁しており、敬四郎は瑛子の実家である姫路で生まれています。敬四郎が生まれる前後、旭荘は山口に滞在しており、最後の妻となる清水瀧との婚儀が進んでいるところでした。旭荘は瀧を連れて大坂へ戻ったのち、敬四郎を引き取ることになりました。そして旭荘と共に暮らした場所が淡路町津村北之坊（淡路町御霊祠畔西折処南畔）でした。

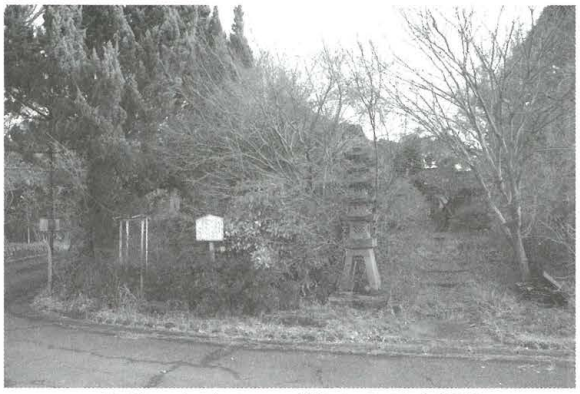
敬四郎は大坂の旭荘と瀧の元で成長します。嘉永五年（一八五二）には妹の義子が生まれますが夭逝、安政二年（一八五五）に弟の正吉が大坂で生まれています。

御霊神社（大阪市中央区淡路町）

敬四郎 初めての日田

文久元年（一八六一）、旭荘一家は大坂で暮らしていましたが、上方の情勢が不安定になってきたため、旭荘の友人や門下生から、一度日田へ帰ることを勧められました。これを受けて、旭荘は二月に一家で日田へ帰ることになり、一二月には会所山の山陰に「雪来館」という建物を新築し、そこに閑居することにしました。

この頃から旭荘は「雪来」という号を用いるようになったと考えられます。しかし旭荘は大坂への思いが強かったのか、翌文久二年（一八六二）一〇月には再び一家で大坂へ戻ることになりました。敬四郎の初めての日田生活は一年半ほどで終わりました。



旭荘一家が日田で暮らした雪来館跡
（日田市日高）

父・旭荘亡くなる

大坂へ戻った旭荘たちでしたが、儒学者の池内陶所や家里松嶠が尊皇攘夷の過激派から殺害されたことや旭荘が病がちであったため、門下生から居を移すことを強く勧められます。そこで長年住んだ大坂の地を離れ、池田（大阪府池田市）へ転居することになりました。

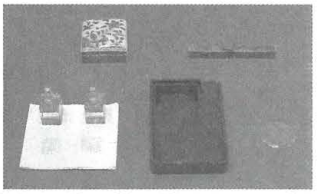
文久三年（一八六三）六月一日、旭荘は転居の準備を終え、慣れ親しんだ大坂の地を離れ、池田へ向かいます。この日は旭荘の門下生であった鼎金城（画家、旭荘に経学・詩文を学ぶ）の葬儀があったため、葬儀ののちに敬四郎と門下生の森秀三（光吉文龍）と共に池田の新居へ向かいました。

住居は伊居太神社（大阪府池田市綾羽）近くの「宮の下」に家を借りました。旭荘の池田における生活は病に悩まされる日々でした。池田では塾を開き新たな門下生をとることもなく、池田に移居してから数ヶ月後である八月一七日の朝五ツ時（午前八時頃）、旭荘は五七歳でなくなりました。

池田へ転居する前後の記録として、旭荘の学僕であった森秀三が書き残した『旭荘公（翁）逝去前後ノ日誌』があります。この記録には旭荘の亡くなる前後の動静が詳しく書かれており、そこには敬四郎の姿も見えます。旭荘が亡くなった後、門下生の間で墓所の相談をしています。その結果、旭荘が長年住んだ大坂への埋葬を主張し、天王寺（大阪市天王寺区茶臼山）にある邦福寺（現・統國寺）に葬られることになりました。その際、旭荘が生前に使っていた水晶の印や朱肉入れ、硯、蝋石製文鎮、眼鏡などの遺愛品が納められました。長男の林外も九月一一日、日田よりかけつけています。

旭荘が亡くなった後、残された妻の瀧や敬四郎はその弟である正吉・龍吉を連れて日田へ戻ることになりました。日田に戻った旭荘遺族らは、中洲（現在の日田市・中之島町）で生活することになったようです。かつてこの中洲には、旭荘が梅を植えて梅林にしたことが伝わっています。

また旭荘が日田をあとにする際、五岳に梅林を



廣瀬旭荘の墓に納められた遺品
（公益財団法人廣瀬資料館蔵）

廣瀬旭荘墓
邦福寺（現・統國寺）

亀山橋から望む中洲
（日田市大字庄手中ノ島）

託したとも言われています。

咸宜園入塾

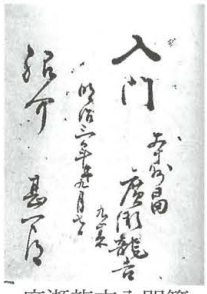
旭荘が亡くなった文久三年（一八六三）、敬四郎は、一三歳になっていました。家族で引き上げてきたのち、敬四郎は咸宜園に入門しています。敬四郎の入門簿が残っていないため、正確な入門時期はわかりませんが、敬四郎の兄である廣瀬林外の日記、文久四年（元治元年＝一八六四）一月九日条に「仁四郎入塾」とあることから、この頃に正式に入塾したものと考えられます。慶応二年（一八六六）四月の月旦評には「甚（仁）四郎」の名で、二権五級上に位置しています。また明治四年（一八七一）四月の月旦評には敬四郎の名で三権八級下に昇級しているのが確認できます。

また林外の日記から、慶応二年八月四日に幼名の仁四郎から敬四郎に改名していることがわかります。咸宜園の職任では、東塾長や司計、権舎長などを務めていることがわかります。

敬四郎の異母弟である正吉も咸宜園に入門しています。入門年は不明ですが、慶應二年四月の月旦評では無級に名がみえるので、慶應二年三月頃の入門と思われます。

また明治四年の月旦評では四級下に掲載されています。

一番下の弟である龍吉については、入門簿が残っており、明治三年（一八七〇）九月七日に入門していることがわかっています。そしてその紹介者には「甚（仁）四郎」とあり、弟の紹介者に敬四郎がなっていることがわかります。


廣瀬龍吉入門簿

慶應義塾入社

咸宜園で学んでいた敬四郎でしたが、明治五年（一八七二）八月八日に同じく咸宜園門下生であった横田国臣（のち大審院長官）や田代丈吉らと同日付で慶応義塾に入社します。慶応義塾において、咸宜園の入門簿に相当する「慶応義塾入社帳」という史料が残っており、入社にあたって、「入社證人ノ姓名」（咸宜園の紹介者に相当）を書く欄があります。そこには「東京第四大区一小区駿河台甲賀町寄宿 廣瀬孝 正院八等出仕」とあり、敬四郎の兄・廣瀬林外が保証人となっています。林外は、明治五年に咸宜園を唐川即定に託して、洋学や「学制」の視察のために上京したことが伝わっています。また長三洲の斡旋により、東京大学史料編纂所の前身にあたる、太政官正院に務めたことが知られています。この入社帳の記録により、林外が正院に八等で出仕していたこと、また駿河台甲賀町（現在の東京都千代田区神田駿河台）に寄宿していたことがわかります。

明治四年辛未四月月旦評
（公益財団法人廣瀬資料館蔵）
旭荘の遺児である敬四郎（七級）、正吉（四級）、龍吉（無級）の３人の名前が見える。また八級には清浦奎吾（釈普寂）が掲載されている。

敬四郎ら以外で慶応義塾に入社した咸宜園関係の人物は管見の限り、明治八年九月入社の小栗香平（日田豆田町士族小栗憲一長男、証人は小栗憲一）、同年一〇月の廣瀬楨蔵（大分県豊後国第八大区五小区日田郡堀田村六百五十一番地廣瀬範治長男、証人は朝吹英二）がいます。

慶應義塾において勉学に励んでいた敬四郎ですが、明治八年（一八七五）に慶応義塾より埼玉県中学校に教員として派遣されます。当時の慶応義塾は英学を学ぼうとする者が集まってきており、多数の英学者を輩出していました。また全国に様々な学校が開設される中、英学教師を招く場合、慶応義塾からの派遣に頼っていたというのが現状だったようです。また派遣される人物はただ教職員としてだけでなく、学校の創設にあたっての各種相談やその経営まで全面的に委託されるものもあったそうです。敬四郎が埼玉県中学においてどのような教育活動をしたかは定かではありませんが、明治一〇年（一八七七）二月には、群馬県に任官しているので、それまでには埼玉県中学での教職員生活は終わっていたと思われます。

官吏として奉職

【群馬県時代】

明治一〇年（一八七七）二月二二日、廣瀬敬四郎は群馬県第五課に七等で出仕し、師範学校副長も併せて任命されています。これは敬四郎の咸宜園や慶応義塾、埼玉県中学などの経歴が関係しているものと思われます。

敬四郎は小学校や中学校の試験監督や新しい学校の開校式、学事を奨励するため各地域への出張

や教育会議への出張などを精力的に行っており、主に教育行政でその能力を発揮していました。

明治10年の写真
（敬四郎は後方左の人物か）

明治一三年（一八八〇）二月、敬四郎は大蔵省へ出向することになり、群馬県での勤務を終えています。

【大蔵省・租税局時代】

明治一三年（一八八〇）二月、敬四郎は群馬県から大蔵省の租税局（のちに主税局に改称）へ出向となりました。この時、大蔵省には日田出身で咸宜園にも学んだ中村元雄がいました。中村は大蔵・内務官僚として活躍し、群馬県知事や貴族院議員を務めた人物です。もしかしたら、敬四郎の群馬県から大蔵省への出向に中村が関係していたのかも知れません。

同年の一〇月、敬四郎は仙台出張所に勤務し、東北地方を担当します。翌年の一四年八月には静岡出張所に転勤しています。

そして、明治一七年（一八八四）五月に大蔵省に主税局が置かれ、敬四郎は二等に任命され勤務することになります。同年七月には愛媛県収税長、明治一九年（一八八六）一一月には熊本県収税長、明治二三年（一八九〇）には神奈川県収税長を務めます。

敬四郎は、大蔵省に出向以降、酒造検査并酒類検査監査・証券印紙税其他雑税検査方監査の職、国税領収、煙草印紙貼用検査方監査、文官普通試験委員、会計主務官（大蔵省熊本県）などの多岐に亘る業務に関わり、その能力を遺憾なく発揮しました。

ところが、神奈川県収税長を務めていた明治二七年（一八九四）一月一七日、敬四郎は四二歳の若さで亡くなってしまいました。

敬四郎の家族たち

父・旭荘が亡くなった後、旭荘家を継いだのは敬四郎でした。敬四郎には二人の異母弟がいました。五男の正吉は、咸宜園で学んだのち、陸軍に務めて予備役となっていたようですが、明治二一年（一八八八）七月一七日、山口市石観音町の病院で亡くなっています。享年三四歳でした。

六男の龍吉も兄たちと同様に咸宜園で学んでおり、明治三年（一八七〇）九月七日の入門簿が残っています。兄である敬四郎（入門簿の記述は幼名の甚（仁）四郎）が紹介者となり、九歳で咸宜園に入ったことがわかります。明治一九年には陸軍少尉になっていることが確認できます。最終的には善通寺連隊区司令官・歩兵中佐を務めています。その後は福井県鯖江市に住み、実母である瀧と共に暮らしていたようです。ちなみに龍吉の子供の貞年は、海軍兵学校に入り、太平洋戦争の際には重巡洋艦・筑摩の副長を務めています。

敬四郎は群馬県に務めていた明治一三年（一八八〇）九月二日、妻セウ（安政四年二月六日生）と結婚し、長女・順、長男・巻之、二女・啓、三女・敏の一男三女をもうけます。

長男の巻之は、明治一七年（一八八四）に敬四郎が赴任していた静岡で生まれています。巻之は、明治四一年（一九〇八）に香川県立丸亀中学校を卒業したのち、東京獣医学校獣医科を卒業して獣医となります。新潟県・群馬県・石川県・山形県にて、衛生技手や警察部衛生課などに奉職しています。巻之は、昭和一二年（一九三七）四月一一日、山形県在職中に五四歳で亡くなりました。

寄託資料の中から見つかった横浜で撮影された写真（敬四郎の最期の赴任地が神奈川県横浜であることから、写っているのは敬四郎の妻子たちであろうか）

現在へ

巻之は二男一女をもうけており、長男の建吉は淡窓の名である「建」と旭荘の通称・謙吉の「吉」をとり、「建吉」と命名されたことが伝わっています。そして現在は建吉の長男である廣瀬敬一氏の元に旭荘・敬四郎に関わる貴重な史料群が引き継がれて現在に至っています。

第二章　廣瀬旭荘・敬四郎文庫とは

平成二四年（二〇一二）、咸宜園教育研究センターでは、咸宜園第二代塾主である廣瀬旭荘の没後一五〇年記念の特別展を開催いたしました。その後、特別展をきっかけに旭荘の四男・敬四郎のご子孫である廣瀬敬一氏より日田市に問い合わせがあり、東京のご自宅を調査させていただく機会を得ました。

廣瀬敬一氏旧宅
（東京都杉並区永福町2013年3月撮影）

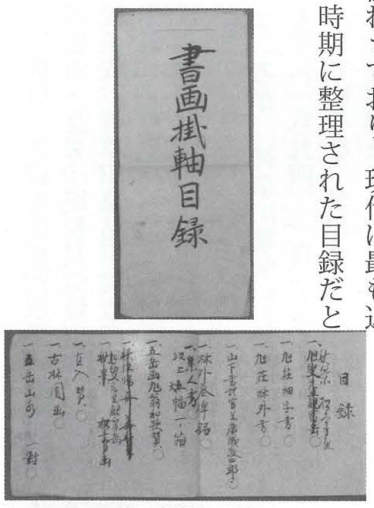
史料発見時の様子

調査の結果、旭荘自身に関わるものや長年暮らした大坂で交流のあった文人たちの史料が多く発見されました。田能村直入や鼎金城などの画人、篠崎小竹や後藤松陰、藤澤東畡などの儒学者・漢詩人などの資料が含まれていました。交流のあった文人たちより贈られた巻子（巻物）類では一〇メートルを超えるものが三本も見つかり、旭荘の交友関係を知る上で大変貴重なものです。また敬四郎に関わる掛軸なども見つかっています。平野五岳や長三洲、横田國臣など咸宜園と関わりのある人々との交流が明治時代に入っても続いていたことがわかります。

その他には旭荘が愛用していたと考えられる眼鏡や安政三年（一八五六）に息子たちに宛てた旭荘の遺言書（林外による写しか）や亡くなる直前に書き上げられた考えられる書など、貴重な資料が多く発見されています。

今回、日田市に寄託いただいたこの史料群について、「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」と名付けました（以下、「文庫」と記す）。

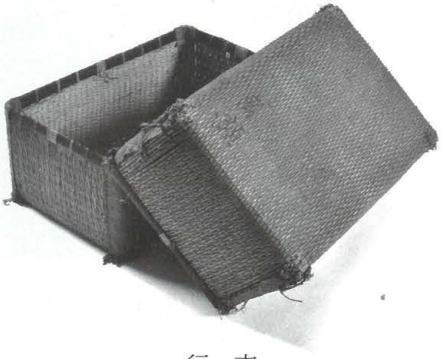
まず「文庫」の中心をなすのが三四件五一本に及ぶ旭荘や敬四郎に関わる掛軸や巻子類です。今回の展示においてもこの史料群を中心に展示しており、大坂で交流のあった文人たちの資料もこの資料群に含まれます。敬四郎の孫にあたる廣瀬建吉氏（敬一氏の父）と関係があると思われる史料群の中から見つかった「書画掛軸目録」という資料があります。この目録に掲載されている掛軸・巻子類のほとんどが、現存して廣瀬敬一氏の元に伝わっており、現代に最も近い時期に整理された目録だと考えられます。



書画掛軸目録
（廣瀬旭荘・敬四郎文庫）

行李（こうり）

「廣瀬」と墨書きされた大きい行李の中からは、一部江戸後期のものを含みますが、明治期の書籍を中心とした資料群が収められていました。また昭和三〇年代ぐらいまでの手紙や葉書など雑多なものが多く含まれています。主に敬四郎の息子である巻之（けんし）関係のものが多数を占めます。



行　李

廣瀬建吉鞄

「廣瀬建吉」と書かれた鞄の中からは、「旭荘珍蔵」の蔵書印が押された『草字彙（そうじい）』や旭荘の漢詩集である『梅墩詩鈔（ばいとんししょう）』などが収められていました。また林外や敬四郎の雑記、敬四郎やその息子

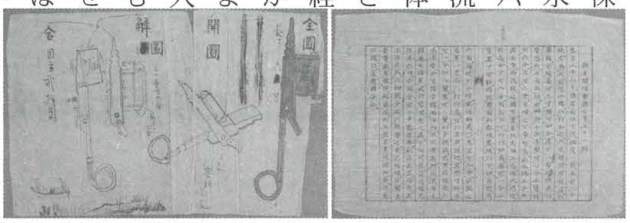
廣瀬建吉鞄

である巻之の辞令など江戸後期から昭和一〇年代までの様々な資料が見つかっています。

特にこの中からは、旭荘が使用していたと思われる眼鏡や大坂の長柄（ながら）で漁の網に引っかかって発見されたキャンドルスナッファー本体とその時の経緯を記した旭荘の日記『日間瑣事備忘録』の原稿とそのスケッチがあります。

その記録によると天保一三年（一八四二）～嘉永六年（一八五三）の間の六月二六日に大坂長柄の下流付近で、漁の網に謎の物体がかかっていたことが記されています。どのような経緯で旭荘の元にその物体が持ち込まれたかはわかりませんが、旭荘は周囲の友人にその用途を尋ねるも誰も結論を出すことは出来ませんでしたが、日本の物ではなく、「洋物」であろうということで一致しています。

『草字彙』と旭荘蔵書印「旭荘珍蔵」



抄日間瑣事録七月二日則・スケッチ

この物体の正体はろうそくの火を消す道具・キャンドルスナッファーでしたが、その箱状になっている部分に書かれている文字が、オランダ語ではないかと推測した旭荘らは、友人である緒方洪庵にその用途と文字について尋ねるも、洪庵からもわからないという返答でした。結局、結論が出なかったため、この話しはうやむやになり、この時の日記の原稿やスケッチ、またキャンドルスナッファー本体も旭荘家にそのまま保管され、子孫の家に伝わったようです。

キャンドルスナッファー

このほか、廣瀬建吉鞄からは、旭荘が息子たちへの遺言として書き残したものの写しである「御遺置書付之写」や「御教戒書」も見つかりました。

「御遺置書付之写」とは、安政三年（一八五六）に大坂より兄・淡窓の見舞いのために日田に帰ってきた旭荘が、自身の身の上に万が一のことがあった時のために備えて、三人の子供である孝之助（林外）・仁（敬）四郎・正吉に宛てた遺言の写しです。旭荘直筆のものと思われるものは、公益財団法人廣瀬資料館に伝わっています。

「御教戒書」は咸宜園の塾主を務めていた廣瀬青邨が江戸への遊学のため、塾政を廣瀬林外が預かることになりました。これを受けて旭荘は、息子である林外に対して、様々な助言を行ったのが本資料です。自身の経験に基づく助言のほか、旭荘の後妻である継母に対して、もっとよく仕えるようにとも苦言を呈しており、旭荘の塾運営の考え方や家族観を知る上で大変貴重な史料です。

御遺置書付之写
（廣瀬旭荘書の写し）

御教戒書
（廣瀬孝之助宛）

以上、「文庫」を構成する資料群のうち、まとまったものをご紹介いたしましたが、廣瀬敬一氏宅からは、「蔵書目録附書画幅目録」（元治元年正月）、「中洲家具目録」（慶応四年）、「書画掛物目録」（明治九年三月二四日）、「蔵書目録」などが発見されました。これらの目録には、日田廣瀬家に現在伝わっている家具類も見られます。これらの目録類は咸宜園に関わる掛軸や蔵書を知る上で有益な史料です。また旭荘や敬四郎に関する多くの書簡類も発見されたことから、今後も「文庫」の資料整理を引き続き進めて参ります。

出品資料図版・解説

1．廣瀬淡窓・旭荘・林外書

咸宜園を創設した廣瀬淡窓、二代塾主を務めた旭荘、旭荘の長男でのちに淡窓の養子となり四代塾主を務めた林外の書。旭荘の書に壬戌仲秋（文久二年八月頃）、号も「山陰老人」とあることから、会所山の山陰「雪来館」にいた頃であろう。文庫の中から見つかった目録の中に「旭荘 林外書」とあることから後年になって、淡窓の書を貼り合わせて、仕立てたものと考えられる。※巻頭写真36参照

2．廣瀬旭荘書画「夢登富山」

廣瀬旭荘書画の富士山図。旭荘が「夢登富山」と題していることから、夢の中で富士山に登り、その情景を描いたものか。※巻頭写真37参照

3．抄日間瑣事備録 七月二日 一則

キャンドルスナッファー

廣瀬旭荘の日記『日間瑣事備忘録』の草稿とキャンドルスナッファー。この草稿によると、六月二六日、長柄（大阪市北区）の下流で、漁の網に謎の物体がかかった。旭荘はその物体の重さや形状を計り、寸法を記述し、スケッチを残している。友人らと協議して、「洋物」であろうと判断している。ある者の意見ではろうそくの火を剪る道具、あるいは武器ではないかとの意見が出たが、友人の緒方洪庵に尋ねるも、結局その用途については結論がでなかった。この物体の正体は、キャンドルスナッファー（ろうそくの火消し）である。旭荘が保管していたものがそのまま子孫家に伝わったもの。※巻頭写真4参照

4．田能村小虎（直入）画「西下図」

田能村直入（一八一四～一九〇七）。南画家。豊後国直入郡竹田町生。旧姓は三宮。本名は癡。号は直入山樵、小虎山人など。九歳で田能村竹田に師事し、養嗣子となって田能村姓を称する。師の竹田が亡くなった後、遊歴したのち大坂に落ち着き、旭荘と交流があった。本図は嘉永七年＝安政元年に旭荘が山陰地方へ遊歴する際に直入から旭荘へ贈られたもの。※巻頭写真44参照

5．廣瀬旭荘子孫家伝来眼鏡

廣瀬旭荘子孫宅から発見された眼鏡。皮製の袋の中に眼鏡が四つ納められていた。旭荘が眼鏡を使用していたことは『日間瑣事備忘録』や西島青浦によって画かれた「廣瀬旭荘肖像画」（公益財団法人廣瀬資料館蔵）によって知られる。肖像画の眼鏡とも非常に酷似しており、実際に旭荘が使用していたものではないかと推測される。

※巻頭写真2参照

6．吉川松谷画「芝仙竹寿図」

吉川松谷（一八〇〇～一八五六）。近江の人。名は米、字は明啓、別号に少穀・樵谷、通称を松之助・巳之介。彦根藩士であったが、大坂に移り住み画業を営んだ。本資料は、「芝仙竹寿」と題して、霊芝・水仙・竹・石・長春（薔薇）を画いたもの。己酉（嘉永二年）に廣瀬旭荘に送ったものであることがわかる。

※巻頭写真39参照

7．平野五岳画 廣瀬旭荘書

平野五岳が絵を画き、廣瀬旭荘が書を添えた合作。旭荘が「雪来山樵」を名乗っていることから、会所山の山陰「雪来館」に居住していた文久元年末～文久二年一〇月のまでの間の作と思われる。文久元年四月、旭荘は日田に家族を携え帰郷しており、その時の住居としたのが会所山の山陰に新築したのが「雪来館」である。※巻頭写真40参照

8．旭荘先生西省巻子（旭荘帰省）

嘉永四年五月、旭荘は敬四郎の母親である山名瑛子と離縁し、一度日田へ帰郷することになった。この時、旭荘の西省を知った友人らは旭荘に向けて詩・書・画を送り、一つの巻子に仕立てものが本資料である。本資料は全長一八メートルを超えるもので、大変長い巻子である。冒頭の後藤松陰を始め、田能村直入、柴秋邨、鼎金城、篠崎竹陰、魚住荊石、安藤秋里、藤井藍田、藤井竹外、行徳玉江など二〇名を超える文人らが名を連ね、最後には藤澤東畝の書が添えられている。当時の大坂の主だった文人たちの名前が確認でき、旭荘の交流の広さをうかがうことができる。※巻頭写真35－1・2参照

9．廣瀬旭荘送西下漢詩巻子（旭荘西下）

旭荘が山陰方面へ遊歴するにあたり、大坂の友人たちが旭荘へ送った詩・書・画を巻子に仕立てたのが本資料。全長一三メートルを超える。名前が見える文人は、後藤松陰を始めとして、奥野小山、安藤秋里、田中介眉、魚住荊石、藤澤東畝、坂上九山（平野屋甚左衛門）、小林石峰、鼎金城、柴秋邨など三〇名近い文人らが寄せている。※巻頭写真33参照

10．王治本書

王治本（一八三五～一九〇八）。清の人。文人。号は桼（漆）園など。明治一〇年（一八七七）に中国語の教師等として来日。のち中国公使嘱託になる。東京では元高崎藩主・大河内輝声を始めとした日本近代の漢詩人らと筆談をもって交流した。王治本は明治一五年に静岡を、明治二〇年には熊本を訪問している。敬四郎は明治一五年には静岡租税局、熊本県では明治一九年より収税長として赴任しており、静岡・熊本のいずれかで王治本と面会したものと考えられる。※巻頭写真42参照

11．廣瀬青邨作・敬四郎書「七言絶句」

廣瀬淡窓の養子となり、三代塾主となった青邨（範治）の漢詩。七言絶句。元日にあたり、漢詩を作成するも病気のため筆をとれなかった青邨に代わり、敬四郎が書いたもの。敬四郎は明治五年から八年の間、東京の慶応義塾で学んでおり、青邨が住んでい

た東京神楽坂の「東宜園」にも出入りしていたものと思われる。また敬四郎が地方官吏として就職したのちも手紙のやりとりが続いており、青邨と敬四郎はとても親しい関係だったことがわかる。青邨はこの漢詩を作成してから、約一ヶ月後の明治一七年二月三日、六六歳で亡くなった。※巻頭写真41参照

12．山下秀実書

熊本県書記官であった山下秀実が廣瀬敬四郎に送った書。明治一九年（一八八六）一一月より敬四郎は熊本県収税長を務めていたが、明治二三年一〇月に神奈川県収税長へ転任することになった。そのことを受けて、山下秀実がその栄転を漢文で褒め称えて送ったものと考えられる。山下は内務省に勤務し、静岡県や熊本県警察部において部長の後、熊本県書記官を務めた。明治二二年（一八八九）に設置された日本赤十字社熊本県委員部では、副長を務めている。※巻頭写真43参照

13．廣瀬敬四郎 辞令等

廣瀬敬四郎は、明治五年（一八七二）に咸宜園から慶應義塾に入社したのち、明治八年には慶応から埼玉県中学に派遣されている。その後、明治一〇年には群馬県に入庁し、学務課に務め主に教育行政に携わった。明治一三年からは大蔵省に出向し、収税業務に携わった。赴任地は、宮城県仙台市・静岡県静岡市・愛媛県松山市・熊本県熊本市・神奈川県横浜市である。愛媛・熊本・神奈川では収税長を務めている。

14．廣瀬敬四郎履歴書

廣瀬敬四郎は、明治二七年一月一七日に四四歳の若さで神奈川県収税長在職時に亡くなった。本資料は明治一〇年の群馬県入庁から最期の赴任地である神奈川県収税長までの経歴を記した履歴書。在職中に敬四郎が亡くなったため、国に対して弔慰金などの請求のために敬四郎の経歴を整理したものと考えられる。

15．中洲家具目録

本資料は慶応四年（一八六八）に旭荘家族らが住んでいた中洲の家具を調べた目録。廣瀬旭荘が亡くなったのち、妻・瀧や遺児である敬四郎・正吉・龍吉は日田で生活することとなり、その住居となったのが中洲（中ノ島）である。中洲は咸宜園が所在する堀田村の内であり、旭荘は生前、中洲に梅を植えて梅林としていたという。

16．故廣瀬謙吉叙位記及び沙汰書

大正一三年（一九二四）二月一一日に従五位に追贈されたもの。同様のものが公益財団法人廣瀬資料館にも保管されている。

17．「御遺置書付之写」

大坂より兄・淡窓の見舞いのために日田に帰ってきた旭荘が、自身の身の上に万が一のことがあった時のために備えて、三人の子供である孝之助（林外）・仁（敬）四郎・正吉に宛てた遺言の写し。旭荘直筆のものは、廣瀬資料館に伝わる。内容は林外を本家とすることや遺産相続、また敬四郎・正吉については二〇歳までは勉強することを説き、その後の進路は好きにしてよいことを述べている。特に興味深いのは、一年に一度は誰でもよいから旭荘の墓を参るようにと書いてある点である。都会で葬られた場合、三年間香花が絶えるとお墓が撤去されるからだという。旭荘が亡くなったのはこの遺言が書かれてから七年後である文久三年（一八六三）八月一七日である。

18．「御教戒書」

文久元年四月、旭荘は大坂から日田に帰郷していた。この時期、咸宜園の塾主を務めていた廣瀬青邨は九月に江戸へ遊学しており、その期間は林外が塾政を預かることになった。旭荘は、息子である林外に対して、様々な助言を行ったのが本資料である。自身の経験に基づく助言のほか、旭荘の後妻である継母に対して、もっとよく仕えるようにとも苦言を呈している。文久三年（一八六三）六月、青邨が府内藩校遊焉館に招かれたため、林外が正式に咸宜園第四代塾主に就任した。

19．印章及び印材・文房具等

廣瀬旭荘および敬四郎が使用したと思われる印章（落款類）、印材、文鎮や筆置、墨台（墨床）などの文房具。廣瀬旭荘の「謙印」、「吉甫」や敬四郎の「廣瀬敬印」「日田」（敬四郎は号を日田と名乗っていたと考えられる）などの落款類が見られる。

※五頁参照

20．廣瀬旭荘書「細字書」

文久二年一〇月、日田に帰郷していた廣瀬旭荘とその家族は、長年暮らした大坂へ再び戻ることになった。ところが、儒者が暗殺されるなど政情が不安定なこと、旭荘が病気がちであったことなどを理由に池田（現・大阪府池田市）へ転居することになった。本書には、旭荘の病状が非常に悪化していることを書いており、自身の死が近いことを悟っている様子がうかがえる。旭荘の日記『日間瑣事備忘録』の文久三年七月二四日～二五日条に二日間かけて書を作成しており、その書を府内藩大坂蔵屋敷の谷口氏に託しているが、これが本書であろうか。翌月の八月一七日、廣瀬旭荘は五七歳で亡くなった。

※巻頭写真38参照

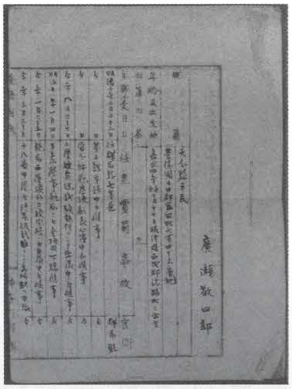
付編　廣瀬敬四郎履歴書

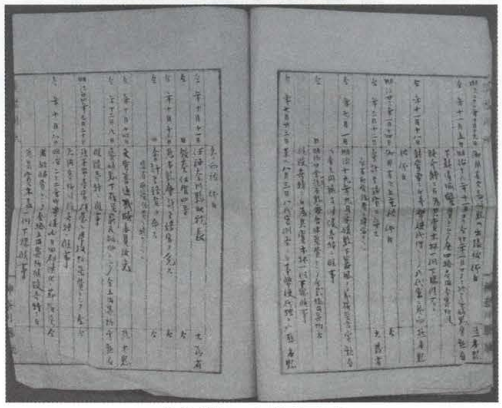
廣瀬敬四郎
族　籍　大分縣平民
　　豊後國日田郡豆田町七百四十六番地
年齢及出生地　嘉永四年辛亥十月十七日摂津國西成郡淡路町ニ出生
旧藩旧名
年號干支月日　任免　賞罰　事故　官衙
明治十年二月二十二日　任群馬縣七等属　群馬縣
仝　日　第五課事務申仕候事　仝
仝　日　當分師範學校副長心得申付候事　仝
仝年八月二十七日　小學校定規試驗執行トシテ出張申付候事　仝
明治十一年一月四日　平素學事勉励ニ付金拾円下賜候事　仝
仝　年一月二十五日　飽馬西學校外二校開校ニ付出張申付候事　仝
仝　年三月三十日　十八番中學生徒昇級試驗トシテ高崎駅ヘ出張申付候事　仝
明治十一年四月十五日　第四十二番中學区小學校定規試驗トシテ出張申付候事　群馬縣
仝　年五月廿日　教育會議ニ付神奈川縣ヘ出張申付候事　仝
仝　年十一月十八日　各小學校生徒定規試驗トシテ學区取締大塚半藏外一名持区ヘ出張申付候事　仝
仝　年十二月廿七日　御巡幸ノ節課員多人数派出課務多端ノ際盡力候ニ付為慰労金七拾銭下賜候事　仝
明治十二年一月四日　終年職務勉励ニ付金八円参拾三銭三厘下賜候事　仝
仝　年一月七日　學則改正教育規程取調掛申付候事　仝
仝　年三月廿二日　定規試驗行ニ付東郡馬郡各學校為巡廻出張申付候事　仝
仝　年四月十四日　鳥川學校定規試驗臨監トシテ出張申付候事　仝
仝　年四月廿二日　縣會答辨委員申付候事　仝
仝　年五月十九日　任群馬縣六等属　仝
仝　師範學校副長心得差免候事　仝
仝　年七月十七日　皇太后宮伊香保ヘ行啓ノ節御列外ニ属シ供奉ノ輩不時患者手當トシテノ出張申付候事　仝
仝　年十月二十八日　北甘楽・緑野両郡縣令巡按ニ付随行申付候事　仝
仝　年十一月五日　新田山田邑楽三郡縣令巡回ニ付随行申付候事　仝
仝　年十一月廿四日　學事奨励トシテ碓氷郡巡回申付候事　仝
仝　年十二月十三日　南勢多郡大胡學校新築落成開校式執行ニ付臨場且近傍學校巡視申付候事　仝
　　年十二月廿五日　任群馬縣五等属　仝
明治十三年二月十三日　御用有之大蔵省ヘ出向申付候事　大蔵省
仝　年二月十六日　任五等属但租税局出務　仝
仝　年二月十七日　新課掛詰申付候事　仝
仝　年九月十日　本年一月廿六日夜高寄駅大災ニ付罹災者ヘ為救恤金貳円致施與候段奇特ニ候事　群馬縣
仝　客事虎列刺病流行ノ際豫防費ノ内、金壱円五拾銭寄附候段奇特ニ候事　仝
仝　年十月廿五日　租税局仙臺出張所在勤申付候事　租税局
明治十四年二月七日　十三年度酒造検査并酒桶検査監査トシテ更ニ宮城縣外五縣ヘ出張申付候事　大蔵省
　　但証券印紙税其他雑税検査方監査ノ職モ兼務可致事
仝　年八月廿七日　租税局静岡出張所在勤申付候事　租税局
仝　年十月一日　拙者不在中代理相違候事　租税局静岡出張所長大義少書記官
仝　年十二月廿七日　出張所事務多端ノ折柄格別勉励候ニ付貳拾円下賜候事　租税局静岡出張所
明治十五年二月六日　駿豆地方酒造検査方監査并國税領収ノ義各郡役所ヘ協議ノ為巡回申付候事　仝
仝　年二月廿八日　事務勉励ニ付為慰労月給三分ノ一ト賜候事　大蔵省
仝　年三月十四日　遠州村々酒造検査并ニ國税領収ノ義各郡役所ヘ為協議出張申付候事　静岡租税局出張所
仝　年三月十五日　出張所事務多端ノ折柄格別勉励候ニ付　大蔵省

仝	年四月廿九日	金拾円下賜候事
仝	年六月廿九日	仝上二付金貳拾円下賜候事
仝	年七月八日	仝上二付金貳拾円下賜候事
仝	年八月三十日	任四等属
		出張所事務多端ノ折格別勉励二付金貳拾円ト賜候事
明治十五年十月廿四日		仝上二付金貳拾円下賜候事
仝	年十二月廿五日	仝上二付金貳拾円下賜候事
明治十六年一月九日		酒造検査方監査トシテ出張申付候事
仝	年一月廿六日	出張所事務多端ノ折格別勉励二付金貳拾円下賜候事
仝	年二月十七日	昨十五年中事務勉励二付為慰労金拾六円六拾六銭六厘下賜候事
仝	年五月廿六日	帰東京申付候事
仝	年六月七日	任三等属
仝	年六月十五日	帰東京申付置候処更二當分静岡出張所在勤申付候事
仝	年九月廿八日	出張所事務多端ノ折柄格別勉励二付金参拾五円下賜候事
仝	年九月廿九日	任二等属
仝	年十一月八日	遠江國城東郡中地價修正額不服村々刈様友炬草印紙貼用検査方監査トシテ出張申付候事
明治十七年二月廿八日		事務勉励二付為慰労金五拾円下賜候事
仝	年三月七日	酒造検査方監査トシテ所轄内へ出張申付候事
仝	年四月四日	出張所事務多端ノ折格別勉励候二付金参拾五円下賜候事
仝	年五月二十日	大蔵省中主税局被置
仝	年五月二十日	任二等主税属
仝	年五月廿三日	青木権少書記官帰京二付元租税局名古屋出張所ノ事務引継トシテ出張申付候事
仝	年六月十一日	酒税課詰申付候事
仝	年六月三十日	旧租税局静岡出張所事務多端ノ折格別勉励二付金貳拾七円下賜候事
明治十七年七月廿九日		任愛媛縣収税長
仝	日	日俸六拾円下賜候事
仝	年十月九日	叙従七位
仝	年十二月五日	本年八月暴風ノ節愛媛縣下罹災者へ金拾円施与候段奇特二付為其賞木杯盃一個下賜候事
明治十八年五月廿九日		旧租税局静岡出張所事務勉励二付為慰労金拾円下賜候事
明治十九年一月十三日		自今月俸七拾円下賜候事
仝	年八月廿一日	叙奏任官五等賜上級俸
仝	年十一月十三日	任熊本縣収税長
仝	日	叙奏任官五等賜上級俸
明治廿年二月二十日		御用二付上京被仰付
仝	年八月三日	御用有之福岡縣へ出張被仰付
仝	年八月廿八日	御用有之福岡縣へ出張被仰付
明治廿一年三月七日		御用有之長崎縣へ出張被仰付
仝	年五月二日	菊池神社例祭二付奉幣使代理トシテ参向被仰付
仝	年七月十八日	御用有之鹿児島大分両縣へ出張被仰付
仝	年十二月廿五日	土地整理事業精励二付為慰労金七拾五円下賜
明治二十二年二月廿八日		来ル三月四日祈年祭二付菊池神社奉幣使代理トシテ参向被仰付
仝	年三月十八日	御用有之福岡佐賀両縣へ出張被仰付
仝	年四月十二日	御用有之上京被仰付
仝	年八月一日	陞叙奏任官四等賜下級俸
仝	年九月廿七日	文官普通試験委員被御仰付
明治二十二年十月十九日		御用有之長崎縣へ出張被仰付
仝	年十一月五日	明治十八年十一月ヨリ仝廿年一月マテニ於テ愛媛縣下新道開鑿費トシテ金四拾壱円余寄附候

仝	年四月廿九日	大蔵省
仝	年六月廿九日	税局静岡
仝	年七月八日	出張所
仝	年八月三十日	大蔵省
明治十五年十月廿四日		
仝	年十二月廿五日	
明治十六年一月九日		
仝	年一月廿六日	
仝	年二月十七日	租税局静岡出張所
仝	年五月廿六日	大蔵省
仝	年六月七日	
仝	年六月十五日	
仝	年九月廿八日	
仝	年九月廿九日	租税局静岡出張所
仝	年十一月八日	
明治十七年二月廿八日		大蔵省
仝	年三月七日	税局静岡出張所
仝	年四月四日	大蔵省
仝	年五月二十日	
仝	年五月二十日	主税局
仝	年五月廿三日	
仝	年六月十一日	
仝	年六月三十日	
明治十七年七月廿九日		太政官
仝	日	
仝	年十月九日	賞勲局
仝	年十二月五日	
明治十八年五月廿九日		主税局
明治十九年一月十三日		内閣
仝	年八月廿一日	
仝	年十一月十三日	
仝	日	
明治廿年二月二十日		熊本縣
仝	年八月三日	
仝	年八月廿八日	
明治廿一年三月七日		仝
仝	年五月二日	仝
仝	年七月十八日	仝
仝	年十二月廿五日	仝
明治二十二年二月廿八日		
仝	年三月十八日	仝
仝	年四月十二日	仝
仝	年八月一日	内閣
仝	年九月廿七日	熊本縣
明治二十二年十月十九日		熊本縣
仝	年十一月五日	賞勲局

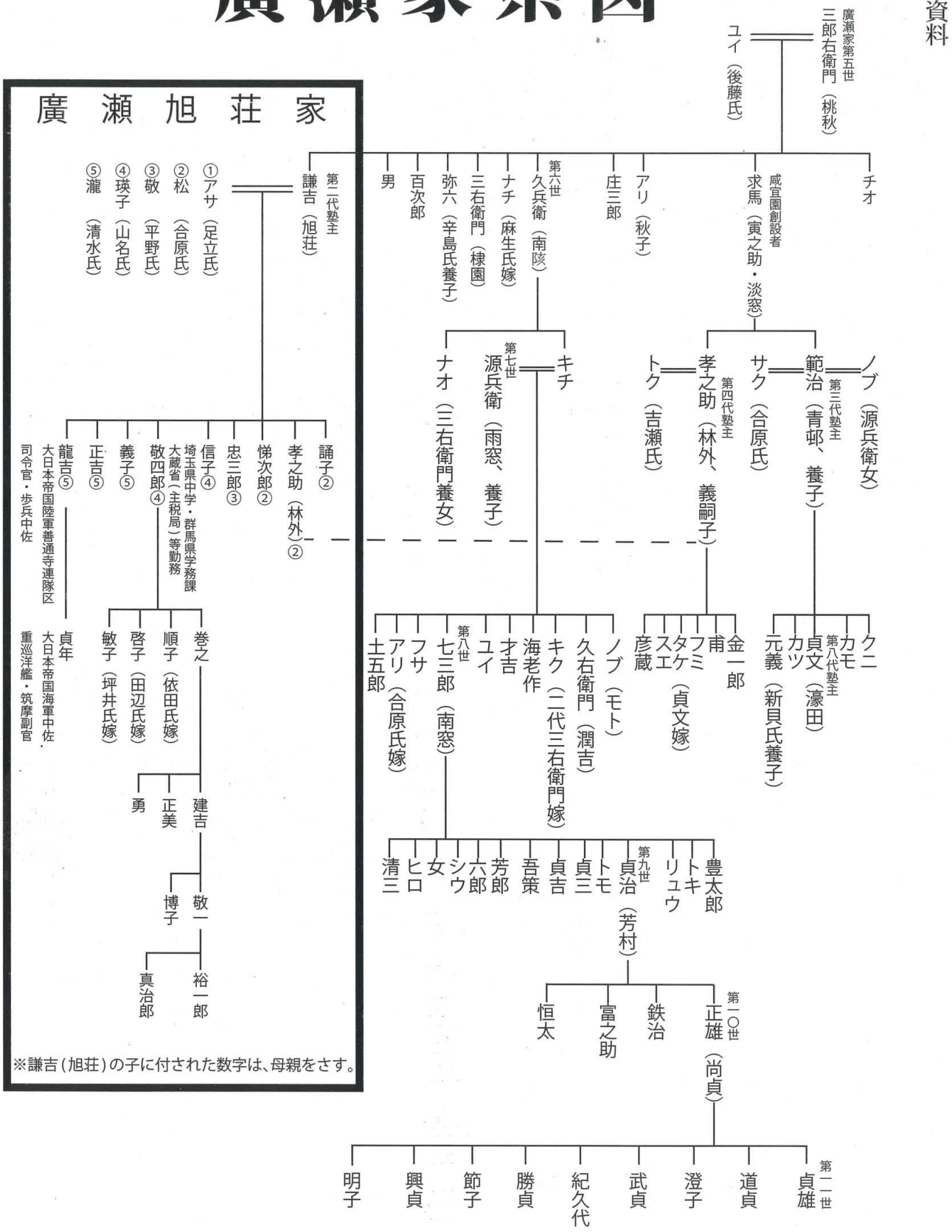
仝	年十一月十八日	段奇特ニ付為其賞木杯一個下賜候事 新嘗祭祭ニ付奉幣使代理トシテ八代宮ニ参向 被仰付	熊本縣
明治廿三年一月十四日		御用有之上京被仰付	仝
仝	年三月十二日	會計主務官ヲ命ス 當省所管経費ヲ擔當スヘシ	大蔵省
仝	年七月一日	明治十九年九月愛媛縣下暴風ノ節罹災者 ヘ金五円施与候段奇特ニ候事	賞勲局
仝	日	明治廿年一月熊本縣廳舎建築費トシテ金貳拾円寄附 候段奇特ニ付為其賞木ハ杯一個下賜候事	仝
仝	年七月廿三日	来ル八月三日八代宮例祭ニ付奉幣使代理トシテ 参向被　仰付	熊本縣
仝	年十月十一日	任神奈川縣収税長	大蔵省
仝	日	叙奏任官四等	仝
仝	年十月十三日	熊本縣會計主務官ヲ免ス 當省所管経費ヲ擔言スヘシ	仝
仝	年十月十四日	文官普通試験委員被免	熊本縣
仝	年十二月八日	愛媛縣下罹災窮民救助トシテ金五円寄付 候段奇特ニ候事	賞勲局
明治廿四年三月二十日		熊本市尋常碩臺小學校改築費トシテ金 六円寄附候段奇特ニ候事	仝
仝	年十月八日	明治二十二年中豊後國日田郡洪水ノ節罹災 者救助費トシテ金拾五円寄附候段奇特ニ付 為其賞木盃一個下賜候事	仝
明治廿四年十月廿六日		明治廿二年中熊本縣下震災ノ節被害者救 助費トシテ金拾壱円寄附候段奇特ニ付為 其賞木杯一個下賜	賞勲局
仝	年十二月十一日	叙正七位	
仝	年八月十六日	地方高等官俸給改正　年俸千四百円	
明治廿五円十一月廿日		勅令九十六号高等官々等俸給令ニ依リ高等官 六等ニ叙セラル	
明治廿六年十一月十日		文官普通試験委員ヲ命ス	神奈川縣
仝	年仝月十八日	陞叙高等官五等	内閣
仝	年十二月一日	改正地方官制實施	宮内省
仝	年十二月六日	叙従六位	仝
明治廿七年一月十七日		叙正六位	仝
仝	日	特旨ヲ以テ位一級被進	





廣瀬敬四郎履歴書
「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」

廣瀬家系図


廣瀬家第五世
三郎右衛門（桃秋）
ユイ（後藤氏）
チオ
咸宜園創設者
求馬（寅之助・淡窓）
アリ（秋子）
庄三郎
第六世
久兵衛（南陔）
ナチ（麻生氏嫁）
三右衛門（棣園）
弥六（辛島氏養子）
百次郎
男
第二代塾主
謙吉（旭荘）
①アサ（足立氏）
②松（合原氏）
③敬（平野氏）
④瑛子（山名氏）
⑤瀧（清水氏）
誦子②
孝之助（林外）②
悌次郎②
忠三郎③
信子④
埼玉県中学・群馬県学務課
大蔵省（主税局）等勤務
敬四郎④
義子⑤
正吉⑤
龍吉⑤
大日本帝国陸軍善通寺連隊区
司令官・歩兵中佐
貞年
大日本帝国海軍中佐
重巡洋艦・筑摩副官
巻之
順子（依田氏嫁）
啓子（田辺氏嫁）
敏子（坪井氏嫁）
建吉
勇
正美
敬一
博子
裕一郎
真治郎
廣瀬旭荘家
※謙吉（旭荘）の子に付された数字は、母親をさす。
第七世
源兵衛（雨窓、養子）
キチ
ナオ（三右衛門養女）
第四代塾主
孝之助（林外、義嗣子）
トク（吉瀬氏）
第三代塾主
範治（青邨、養子）
サク（合原氏）
ノブ（源兵衛女）
金一郎
甫
フミ
タケ
スエ（貞文嫁）
彦蔵
クニ
カモ
第八代塾主
貞文（濠田）
カツ
元義（新貝氏養子）
ノブ（モト）
久右衛門（潤吉）
キク（二代三右衛門嫁）
海老作
才吉
ユイ
第八世
七三郎（南窓）
フサ
アリ（合原氏嫁）
土五郎
豊太郎
トキ
リュウ
第九世
貞治（芳村）
貞三
トモ
貞吉
吾策
芳郎
六郎
シウ
女
ヒロ
清三
第一〇世
正雄（尚貞）
鉄治
富之助
恒太
第一一世
貞雄
道貞
澄子
武貞
紀久代
勝貞
節子
興貞
明子

平成２８年度咸宜園教育研究センター企画展　展示資料一覧

No.	展示資料名	点数	法　　量	所蔵先	備　　考
1	廣瀬淡窓・旭荘・林外書	1	199.5 × 85.6	個人蔵（寄託品）	紙本墨書　掛軸
2	廣瀬旭荘書画「夢登富山」	1	205.5 × 67.7	個人蔵（寄託品）	絹本墨書　掛軸
3	抄日間瑣事備録 七月二日 一則	1	23.6 × 33.0	個人蔵（寄託品）	廣瀬旭荘の日記（草稿）
	キャンドルスナッファー　スケッチ	1	15.2 × 24.6	個人蔵（寄託品）	
	キャンドルスナッファー	1	18.4 （箱部分：3.4 × 3.0）	個人蔵（寄託品）	金属製　持ち手の部分一部破損ヵ
	抄日間瑣事備録 七月二日 一則（写し）	1	27.4 × 20.0	個人蔵（寄託品）	写し　清書版
4	田能村小虎（直入）画「西下図」	1	181.5 × 62.0	個人蔵（寄託品）	紙本著色　掛軸　安政元年（1854）秋頃
5	廣瀬旭荘子孫家伝来眼鏡	4		個人蔵（寄託品）	江戸時代
	眼鏡の袋	(1)	16.5 × 17.4		
	眼鏡（両耳紐あり）	(1)	11.0 × 5.0		
	眼鏡（片耳だけ紐あり）	(1)	10.8 × 4.9		
	眼鏡（紐なし）	(1)	11.0 × 4.9		
	眼鏡（紐なし）	(1)	10.8 × 4.9		
6	吉川松谷画「芝仙竹寿図」	1	194.8 × 62.7	個人蔵（寄託品）	嘉永２年（1849）頃　紙本著色　掛軸
7	平野五岳画 廣瀬旭荘書	1	209.4 × 65.6	個人蔵（寄託品）	文久２年（1862）頃　紙本著色　掛軸
8	旭荘先生西省巻子（旭荘帰省）	1	22.9 × 1874.1	個人蔵（寄託品）	嘉永４年（1851）紙本墨書・著色 巻子
9	廣瀬旭荘送西下漢詩巻子（旭荘西下）	1	21.1 × 1367.5	個人蔵（寄託品）	嘉永７年（1854）紙本墨書・著色 巻子
10	王治本書	1	173.6 × 45.1	個人蔵（寄託品）	明治時代　紙本墨書　掛軸
11	廣瀬青邨作・敬四郎書「七言絶句」	1	196.9 × 62.6	個人蔵（寄託品）	明治 17 年（1884）元日 紙本墨書 掛軸
12	山下秀実（集身山人）書	1	204.2 × 48.2	個人蔵（寄託品）	明治 23 年（1890）10 月頃　紙本墨書　掛軸
13	廣瀬敬四郎 辞令等	9		個人蔵（寄託品）	明治時代
	群馬県第五課入庁辞令書	(1)	19.7 × 26.5		明治 10 年２月 22 日
	教育会議への出張命令	(1)	26.5 × 19.7		明治 11 年５月 30 日
	廣瀬敬四郎宛廣瀬青邨（範治）手紙（封筒）	(1)	16.6 × 5.7		明治時代
	廣瀬敬四郎宛廣瀬青邨（範治）葉書	(1)	14.1 × 9.1		明治 12 年１月 17 日（消印）
	大蔵省（仙台出張所勤務）の辞令	(1)	30.3 × 20.9		明治 13 年 10 月 25 日
	大蔵省 勤勉手当	(1)	22.0 × 28.8		明治 15 年 12 月 25 日
	主税局（大蔵省）勤勉手当	(1)	28.7 × 22		明治 18 年５月 29 日
	廣瀬敬四郎履歴書	(1)	23.1 × 17		明治 19 年の愛媛県収税長時代に作成。
	愛媛県新道開発のため寄付につき、賞勲局より大杯を下賜	(1)	27.8 × 19.3		明治 22 年 11 月５日
14	廣瀬敬四郎履歴書	1	27.9 × 20.2	個人蔵（寄託品）	敬四郎死去後に作成されたもの。
15	中洲家具目録	1	32.8 × 12.2	個人蔵（寄託品）	慶応４年（1868）に作成されたもの。
16	故廣瀬謙吉叙位記及び沙汰書	1	22.8 × 30.9	個人蔵（寄託品）	大正 13 年（1924）２月 11 日。「贈従五位」
		1	22.8 × 30.9	個人蔵（寄託品）	
17	「御遺置書付之写」	1	32.0 × 23.9	個人蔵（寄託品）	安政３年（1856）閏５月１日
18	「御教戒書」	1	24.0 × 16.8	個人蔵（寄託品）	文久元年（1861）10 月
19	印章及び印材・文房具等	34		個人蔵（寄託品）	江戸後期～明治時代
	廣瀬敬四郎落款印（両面）	(1)	2.5 × 2.4 × 2.9		木製
	落款印	(1)	2.4 × 1.6 × 2.7		石製　梅の装飾を施す
	落款印	(1)	3.7 × 3.7 × 6.3		石製　牡丹の装飾を施す
	獅子落款印①	(1)	3.7 × 1.7 × 5.0		石製
	獅子落款印②	(1)	3.4 × 1.5 × 7.0		石製　「寧静」
	獅子落款印③	(1)	2.8 × 1.6 × 6.4		石製
	文鎮	(1)	4.4 × 14.7 × 2.8		金属製
	廣瀬旭荘銅製落款印（龍）	(1)	5.7 × 5.7 × 3.6		銅製
	墨台（墨床）	(1)	6.6 × 9.6 × 3.0		石製

19	筆置	(1)	1.8 × 1 7.3 × 4.4	個人蔵（寄託品）	金属製
	落款印	(1)	2.3 × 1.2 × 6.6		石製
	落款印	(1)	4.7 × 2.3 × 4.4		石製
	落款印	(1)	1.8 × 1.8 × 6.6		水晶
	落款印	(1)	1.2 × 1.1 × 2.2		石製
	落款印「謙」	(1)	1.3 × 1.5 × 2.8		水晶（青色）
	落款印「吉甫」	(1)	1.5 × 1.6 × 3.1		水晶（青色）
	落款印「謙印」	(1)	2.6 × 2.6 × 3.5		石製　緑色
	落款印「吉甫」	(1)	2.7 × 2.7 × 3.4		石製　緑色
	印「廣瀬」	(1)	2.2 × 1.4 × 5.5		象牙ヵ
	落款印	(1)	2.9 × 1.1 × 1.8		石製
	落款印	(1)	1.3 × 1.3 × 3.1		石製
	落款	(1)	1.3 × 1.4 × 2.5		石製
	落款	(1)	1.5 × 1.0 × 3.4		石製
	落款	(1)	1.4 × 1.4 × 2.5		石製
	印材	(1)	2.1 × 1.3 × 4.5		石製
	印材	(1)	2.3 × 1.3 × 6.7		象牙ヵ
	印材	(1)	1.5 × 1.5 × 3.8		水晶
	印材	(1)	1.2 × 1.2 × 4		水晶
	印材	(1)	2.1 × 2.1 × 5.3		石製　黒
	印材	(1)	2.1 × 2.1 × 5.2		石製　黒、廣瀬敬印と下書きあり
	印材	(1)	2.1 × 2.1 × 3.4		木製
	印材	(1)	2 × 2 × 3.4		木製
	印材	(1)	2.2 × 1.3 × 4.3		木製
20	廣瀬旭荘書「細字書」	1	196.7 × 77.5	個人蔵（寄託品）	文久３年（1863）７月頃　紙本墨書　掛軸
	計	69			

主な参考文献

陸軍現役将校同相当官実役停年名簿（明治四四年七月一日調）

『慶応義塾百年史』上巻　慶応義塾　一九五八

『慶応義塾百年史』付録　慶応義塾　一九六九

「日間瑣事備忘」『廣瀬旭荘全集』日記篇一～九（思文閣出版、一九八二～一九九四）

廣瀬林外「林外日記」（自嘉永二年正月至明治四年一一月、公益財団法人廣瀬資料館蔵）

平成二四年度特別展図録「廣瀬旭荘―東遊　大坂　池田―」（日田市教育庁咸宜園教育研究センター　二〇一二）

溝田直己「史料紹介　光吉文龍述『旭荘公逝去前後之日誌』」『咸宜園教育センター研究紀要』第二号（日田市教育委員会、二〇一二）

平成二八年度　咸宜園教育研究センター春季企画展
『廣瀬旭荘・敬四郎文庫』～旭荘子孫に伝承した史料群～

発　行　日　平成二九年二月一六日
編集・発行　日田市教育庁　咸宜園教育研究センター
八七七－〇〇一二
大分県日田市淡窓二－二－一八
電話　〇九七三－二二－〇二六八番
印刷・製本　日田時報紙器印刷株式会社

日田市教育庁咸宜園教育研究センター